

# 男と方舟

作  
やのひでのり

登場人物  
哲朗  
フネ  
香織  
良江  
佐伯  
綾子  
八郎  
シャドウ

1場

哲朗、フネが座っている。

天井の中央から先が輪になった縄がぶら下がっている。

女が登場。

女、天井を見上げ、踏み台に足をかける。

哲朗 やめる！ やめてくれ！

女、縄の輪の中に首を入れ、踏み台をはずしてぶら下がる。

哲朗 ああ！

「ピー」というブザー音。

暗転。

字幕が映し出される。

「ゲームスタート」

2場

哲朗とフネ、正面を向いて座っている。上手に哲朗。下手にフネ。

哲朗 ……。

フネ 哲朗さん。哲朗さん。

哲朗 ……（目覚める）

フネ 気がつかれましたか。

哲朗 ……私は。

フネ 気分はいかがですか。

哲朗 ……ここはどこだ。

フネ どうやらお疲れのようです。安定剤を注入しましょう。

哲朗 ああ、頼む。後どのくらいなんだ。

フネ 残念ながらまだまだです。出発したばかりですし。

哲朗 プログラムは楽しい物だと聞いてたぞ。俺はちっとも楽しくなんか無い。

フネ 楽しいという感覚は個人の主観です。  
私には判断できません。

哲朗 ナビゲーターなんだろ。なんとかしろよ。

フネ 私は設定を用意するまでです。話をどんな風にもって行くかはあなた次第。

哲朗 …ふん。

フネ お嬢さんを失ってしまった。せつかくここまで育てたのに。

哲朗 しかたなかった。ああいう風になるしかなかった。

フネ あなたの中に潜伏する意識がそうさせたのです。

哲朗 そんなこと言われてもしかたない。楽しくならないんだ。とにかく楽しくしてくれ、楽しく。・・・俺は一度も笑わなかった。

フネ 笑っているからと言って一概に楽しいとは限らない。苦しいなかで味わう楽しさだつてあるでしょう。

哲朗 ……とにかく不快なんだ。こんな生活、我慢できない。引き返えしてくれ。

フネ 引き返す？

哲朗 もっと快適な旅だときいていた。

フネ ですからなんでも言ってるでしょう。

快適になるかどうかはあなた次第です。

哲朗 もういい。はやくもどれ。引き返せ。

フネ 本気でいつてるのですか。

哲朗 そうだ。

フネ あなたもご存じでしょう。ほんとうにあそこに戻りたいのですか。もしあなたが本気ならそうしても構わないのですが。

問。

フネ どうしますか。引き返しますか。

哲朗 わかった。もう少しここでやってみる。しかし、こんな狭いところに閉じこめられておかしくなりそうだ。なんとか

してくれ。

フネ できる限りのことはやってみます。そうですね。なにか私にヒントをください。もしかして情報を増幅させることができるかもしれません。

哲朗 ヒント？

フネ そうです。あなたが楽しいと思われること。なんでもいいんです。それを参考にします。

哲朗 俺はスターになりたい。

フネ スターですか。

哲朗 俳優だ。

フネ わかりました。

哲朗 でもいきなりスターだとつまらない。

これからなるうつつてくらいの頃だ。

フネ なるほど。

哲朗 いきなり満たされた状態から始めるとすぐにあきるからな。いままではそれで失敗した。好みの女はさんざん抱いたし、金も使った。でもなぜか毎日日むなしくなるばかりだ。

フネ ほかにほかに。

哲朗 そうだな。奥さんがほしい。

フネ わかりました。どんなタイプがお望みですか。

哲朗 やさしい。顔はそんなに美人じゃない方がいい。

フネ こちらでチョイスします。

哲朗 後はだな。

フネ 後一人ですよ。

哲朗 なんだしけてんな。後一人か。

フネ メモリーが足りません。もうすこしグリードアップされるとあと二人までいけますが。

哲朗 いいよ。がまんするよ。

フネ ……さて、どうされます。

哲朗 やっぱり娘がほしい。

フネ 娘さんですね。どんなタイプで。

哲朗 さっきのが理想だ。あそこまで育てたんだからな。

フネ わかりました。そのようにいたします。  
それで、オブシヨンはどうされますか。

哲朗 そうだなあ。なんでもいいよ。

フネ でしたらランダム抽出ということで私  
にお任せできますか。

哲朗 ランダム抽出？

フネ 乱数表をもとに選び出します。

哲朗 また、おかしな展開にならないか。

フネ それはあなた次第です。

哲朗 そうだ犬、犬がいい。

フネ 犬ですね。わかりました。ご存じと思  
いますがオブシヨンは映像として再生  
できません。それをご了承ください。

哲朗 わかった。

フネ ほかには何を。

哲朗 まだできるのか？

フネ 多少なら。たとえば草、木、そして食  
物などの有機体です。心が和みますよ。  
もちろん目には見えません。しかし、  
再現できないのはあくまで映像レベル  
ですから。たとえばあなたがお食事を  
されます。もちろんオブシヨンですか  
ら見ることはできません。しかし、そ  
の舌触り、におい、満腹感は充分に得  
られます。おわかりですか。

哲朗 適当でいいや。どうせ大したものな  
いんだろつ。

フネ それでは後は私にお任せください。メ  
モリーを最大限使わせていただきます。  
さっそく始めてくれ。

フネ では。そうさせていただきます。

### 3場

哲朗は掃除機をかけている。

妻、良江が帰ってくる。

哲朗 おかえり。今日はすいぶんはやいな。

良江 どうしたの、掃除機なんかかけて。

哲朗 ポテトチップスこぼしちゃった。

良江 今日はこの地区担当だったから。足がばんばんよ。外回りも楽じゃないわ。

哲朗 売れた？

良江 ぜんぜん。みんなお財布かたいわ。最近は通販で買うでしょう。ライバル多いのよ。・・・香織は？

哲朗 塾じゃないのか。

良江 今日は木曜日だから違うわ。何処にいったのかしら。

哲朗、掃除機を止める。

哲朗 そろそろ夕食の支度でもするか。

良江 今日は私作る。材料買つてある？

哲朗 いいよ。お前疲れてるんだから。それより風呂沸いてるぞ、入ったら。

良江 もう沸かしたの。

哲朗 お昼に入っちゃったんだ。たまにはリツチな気分でもいいだろ。昼風呂なんて。

良江 まあ。

香織帰ってくる。

香織 ただいま、あれ、お母さん居るの。

良江 お帰り、清水さんち行つてたの？

香織 うんう、図書館。

良江 関心ね。

哲朗 おれ、買物いってくるわ。

良江 あ、ちょっと。

香織 お母さん、今週のお昼代ちょうだい。

良江 ああ、お昼代。いくらだっけ。(財布を探す)

香織 1500円。

良江 体育祭あさつてだったわよね。

香織 ねえ、あさつて、お弁当お願い。

良江 お父さんのじゃ駄目なの。

香織 お父さんの、色がへんなの。だから。

良江 分かった。おかずなにがいい。はい。

(お金を渡す)

香織 ポークチャップ。

良江 うん、明日、お肉買っとくわ。

哲朗が、外に出かけようとしている。

哲朗 香織、お父さんの弁当いやか。

良江 聞こえたみたいよ。

香織 しまった。

哲朗 アイスクリーム冷蔵庫に入ってるからどうぞ。

哲朗、去る。

良江 そんなにバタバタと出て行かなくてもいいのに。香織、ちょっと。

香織 なに。

良江 お父さん、どうだった。

香織 決まったみたいよ。

良江 ほんと！ どうしてそれを先にいってくれないのよ、あの人は。

香織 ……。

良江 どんなのだった。

香織 ミュージカルよ。役付きだった。

良江 ミュージカル？ まさかこの前言った？

香織 そう、台詞も沢山、あるんだって。

良江 あれ冗談じゃなかったの。

香織 冗談じゃなかったみたいよ。

良江 ……。

香織 お母さんから冗談じゃないの？ っていわれるだろうなあって。言ってた。

良江 お父さんダンスなんてできるのかしら。歌だってそんなにうまくないし、心配だわ。

香織 ダンスはしなくていいんだって。演技だけだった。

良江 ミュージカルなのに？ でもよかった。お祝いね今日は。

香織 はいこれ。



香織は紙袋を良江に渡す。

良江 なによ。これ。

香織 お父さんがね、お母さんが帰ってきたらわたせって。プレゼントらしいよ。

良江は、紙袋の中にある箱の中から  
ネックレスを取り出す。

良江 なに。・・・ネックレス？ どうして。

香織 だからお祝いじゃない、仕事が決まった。

良江 これは？

香織 それはお父さんの。

良江 お父さんの？ お父さん自分のお祝い  
自分で買ったの。

香織 そう、らしいわよ。

良江 まったく・・・でもこれそんなに安く  
ないはずよ。どうしたのかしら。

香織 職安の支給日だって言ってたよ。お金  
あるんだって。

良江 支給日って。前の事務所の？ いやだ。

香織は何をもらったの？。

香織 え？ 私？ なにももらってないよ。

良江 私だけなんて変ね。お父さん、何考  
えてるのかしら。

香織 さあ、いつものきまぐれじゃない。

#### 4場

犬の吠える声。

溶明。

箱の中を皆で覗いている。

(犬の姿は見えない)

香織 かわいい。

哲朗 これはな。血統書なしだけどいい犬だ  
ぞ。ほら盲導犬になるやつだ。なんて

いったかな。

香織 ラブラドルレトリバー！

哲朗 そう、それだ。ラブラドルレトリバー。まだ赤ちゃんだ。かわいいだろ。

香織 うれしい、ほんとにうれしい。ありがとう。

哲朗 よろこんでくれたか。

良江 あなた！ どういうこと！

哲朗 (良江を無視して、犬に) いいこでちゅね。ほら口の横を、こちよこちよつてしてやるだろ。喜ぶんだ。ほらよろこんでる。

香織 いやがってるよ。おとうさん。

哲朗 そんなことない。ムツゴロウさんが言ってたんだから間違いないよ。口の横をな。こちよこちよとー。

ウー、ワン。と吠える。

哲朗 わ。こいつ嘔もうとした。

香織 ほら、やっぱりいやがってた。

哲朗、香織、笑う。

良江 あなた、どこで買ってきたの。

哲朗 ひろった。

良江 こんな高価な犬、捨てるわけないですよ。

哲朗 もらった。

良江 駅前のペットショップね。

哲朗 知らない。言わない。

良江 どうして。

哲朗 言うと、返しにいくだろ。

良江 もう。誰が世話するのよ。

香織 私やる。ちゃんと毎日散歩に連れてく。

哲朗 そうだ、牛乳やろつ。ミルクだ。もつてこい香織。

香織 うん。

香織、冷蔵庫をみる。

香織 お父さん、ないわ。

哲朗 しまった。切らしてたんだ。よし、買いにいこう。香織。

良江 やめて！ 外はもう寒いんだから。香

織、喘息の発作がおきたばかりでしょ。

哲朗 でもボビーがかわいそうだし。

良江 ボビーって？

哲朗 犬の名前だ。こいつボビーって感じるだろ。なにしろアメリカンだしな。

香織 冷蔵庫にコンデンスミルクがあったじゃない。それじゃだめなの。

哲朗 それでいいや。母さん、出して。

良江、ミルクを出す。

哲朗 そろそろスペシャルメニューといくか。

待ってる！ 今日特別なものを用意してある。香織、ほら、犬をさわったんだから手を洗って。すぐに食事だ。

香織 はあい。（去る）

良江 何を始めるの？

哲朗 (OFF) いいから！

哲朗、台所について大きな皿を抱えてくる。（ケーキも見えない）

良江 なにそれ。

哲朗 ケーキだ。今日はこれが主食だ。

良江 ずいぶん豪華ね。もしかして貴方が？

哲朗 まさか。買ってきた。

良江 自分のお祝いをそこまでやるかなあ。

哲朗 今日は、何の日か忘れたのか。

良江 なんの日？

哲朗 香織の誕生日だろ。

良江 あ。

哲朗 忘れてたんじゃないだろうな。

良江 あたし、どうしよう。仕事のことで頭いっぱい。

哲朗 香織、いつか、犬ほしっていった

良江 だろ。誕生日だしフンパツしたんだ。  
一人娘の誕生日忘れるなんて・・・私、  
どうかしてたわ。

哲朗 いいってことよ。俺だっておまえの誕  
生日忘れたことあるもんな。

良江 そうよ！・・そうだったわ。今日は香  
織の誕生日。どうしよう。

哲朗 あんまり気にするなって。今年はや、  
俺は暇だったし、お前は忙しかった。  
少し前までは俺が忙しくて、おまえが  
暇だった。それだけのこと。わかるだ  
ろ？

良江 ・・・・。

哲朗 よし、食おうか。香織！ こっちこい。

香織！。

香織 (OFF)はい！。

犬が吠える。

哲朗 おお、ボビー。お前もケーキ食いた  
い。か。良江、皿持って来い。皿。おい、  
皿だよ。

良江 分かってます。大きな声出さなくても。

香織、入ってくる。

香織 わあ、ケーキ！

哲朗 香織。ほら、イチゴだぞ。ろうそくも  
立てないとな。何本だっけ。・・・じ  
ゃあ、歌うぞ。いいか。ハッピーバース  
デーチュー(唄う)。ハッピーバース  
デーチュー。

香織 お父さんなにやってんの。

哲朗 歌ってるんだよ。ちょっとはずかしい  
けどな。

香織 でも。

哲朗、唄う。

良江 香織、誕生日。おめでとつ。

哲朗 おめでとう。

香織 は？

哲朗 どした。なにかおかしいか。

香織 私の誕生日。今日じゃない。

哲朗 今日じゃない？ 香織の誕生日は16日だろ。

香織 そうよ。

哲朗 そうだろ。誕生日。忘れるわけないだろ。

香織 今日は9日。誕生日は来週。1週間早いわよ。

哲朗 ええ！

良江 ええ！

香織 お父さん……。

哲朗 (カレンダーをみる) しまった。1週間間違えた。なんでだ？ 母さん、どうして教えてくれないんだ。あれ？ さっき、香織の誕生日今日だって事、微塵も疑って無かったよな。

良江 そうよ！ 今日は9日よ。誕生日は来週よ。もう、ほんとおつちよこちよいなんだから。やだわー。ケーキまで買っちゃって。

哲朗 やけにうれしそうにいうな……ああこのケーキどうしよう。高かったのに。誕生日は来週もう一度やればいいじゃない。さ、食べましよう。今日は貴方がフリーになって始めての仕事が決まった日。合格祝いでいいじゃない。

哲朗 お前、知ってたのか。

良江 とくに聞いたわよ。香織から。そうそう、プレゼントありがとう。

哲朗 ん、まあね。

良江 まさか、間違っていないでしょうね。ほんとにレ・ミゼラブルなんでしょうね。

哲朗 レ・ミゼラブル？ なんだそれ。

良江 違うの？

哲朗 俺の決まったのは「オンディーヌ」だよ。

良江 オンディーヌ！ なにそれ？

香織 お母さん、ミュージカルって言うつとレ  
・ミゼラブルしか知らないんだから。

哲朗 ははは。

良江 ……。

哲朗 (笑う) よし、歌うか。歌え！ ほら。

良江 何歌うの？

哲朗 え？

良江 仕事が決まったお祝いの歌？

哲朗 ……とにかく歌わないと始まらない  
だろ。楽しく行こうよ。楽しく。(ミ  
ュージカル風に)ハッピーバースデー  
…。(唄う)。

良江 だからバースデーじゃないでしょ。

哲朗 仕事って英語でなんて言うんだ？

香織 私、知ってる。誕生日じゃない日のお  
祝い。不思議の国のアリスに出てくる  
わ。

(唄う) 誕生日じゃない日、ばんざー  
い。っていうの。

哲朗 そう、それだ。それでいい。

香織 (唄う) 誕生日じゃない日万歳！ツ  
ー。

皆の笑い声。

5場  
フネの中

フネ いかがでしょう。

哲朗 ありがとう。

フネ できるじゃないですか。

哲朗 唄えばなんとかなる気がしてね。ちょ  
っと強引だったか。

フネ でも楽しかったでしょう。

哲朗 楽しかった。もう少し先まで見たかつ  
た。

フネ はい、でもその先はカットさせていた  
だきました。

哲朗 あのあと、電話が入った。オーディシ  
ョン合格の取り消しだ。フリーになっ

てはじめて自分でとった仕事だったの  
に。前のプロダクションの社長がじゃ  
まをした。ほんとに嫌らしいやつだ。  
犬のボビーは私になついた。私は家族  
の中でボビーの世話を一番やった。な  
にしる最も家に長くいるのが私だつた  
からな。

ボビーは17年生きた。犬にとつては  
長生きした方だ。しかし香織は……。  
止めなさい。健康状態によくありませ  
ん。

哲朗 しかし。

フネ もう一度、同じところを再生しますか。  
哲朗 いや。もういい。今日はもう5回目だ。  
……なあ。ボビーはなんとかならな  
いのか。

フネ 何とかといたしますと。

哲朗 ボビーの姿がみたい。

フネ 人間以外の有機体はみることができま  
せん。あくまでオプションですから。  
でも手触りはあるでしょう。

哲朗 ケーキもまともに食いたい。視覚で楽  
しむって言うこともあるんだぞ。

フネ 贅沢を言わないでください。満足な味  
で再現してあります。

哲朗 食うところまでいってないじゃないか。

フネ それはそうでした。次の再現では、少  
々時間を延長しましょう。

哲朗 しかしなにか物足りない。

フネ ですから次回は食べるところまで再現  
しますから。

哲朗 違う。そういう意味じゃない。食い物  
はどうでもいい。……なにかさみしい  
というか。

フネ 登場人物が少ないことですか。それは  
しかたありません。メモリーに限界が  
あるのです。ご了承ください。

哲朗 核家族か……。

フネ 奥様、きれいな方ですね。

哲朗 あのころは二人とも若かったし、私に

も夢があった。仕事はぼちぼちだったが、すべて家内が助けてくれた。貧乏だったがそこその生活はできた。すべてがうまくいっていた。

あの後、私は仕事が山のようにくるようになった。健康食品のコマーシャルが当たったんだ。テレビドラマに映画に引っ張りだになった。そのうち・  
・そして家族を顧みなくなった。まったくな。

フネ だめです。他のことを考えましょう。モクテキチまで、まだまだ時間があります。私達はこの旅を楽しくしないでいけません。いいですね。

哲朗 しかし、やはりなにか物足りない。もっとスリリングで、そうだピストルなんて出せないか。なんかこう、すかっとするようなー。

フネ できません。

哲朗 駄目か。ピストルは。

フネ あたりまえです。きっとあなたはそれで人を撃つでしょう。さもなければ撃たれて死ぬかのどちらかでしょう。

哲朗 まあ、ピストルがあればそういうことになるな。

フネ 危険な展開になるようなものを扱うことはこのプログラムでは許されません。

哲朗 一度経験したことがあるようなものばかりだ。面白みにかけるな。

フネ それはしかたありません。あなたの想像力の問題です。

哲朗 映画かなにかないのか。風と共にさりぬでもなんでもいいんだ。

フネ 残念ながら。

哲朗 だったら小説は、漫画でもいい。週刊誌はないのか。

フネ 無理を言わないでください。あなたはこのフネに乗れただけでも幸せなのです。

哲朗 ・・・・まったく。退屈なところだな。



来る日も来る日も同じことの繰り返し。  
やることとまったくおまえと話すこと  
ぐらいしかない。まるで刑務所のよう  
だ。

フネ  
・・・。

哲朗 目的地まで後どのくらいあるんだ。

フネ それは・・・。

哲朗 ずいぶん飛んだだろう。あとどのくら  
いで到着する。

フネ 時間に直すと約12年です。

哲朗 12年！ 冗談だろ。

フネ 正確には12年と8ヶ月と10日。

哲朗 窓も何も無いこんな狭い部屋にあと1  
2年か！ 気が変になりそうだ。

フネ ですから私がサポート致します。

哲朗 サポートって言ったって私を眠らせて  
くだらない物語を見せるだけじゃない  
か。12年？ 信じられない。

フネ もうしわけありません。もう少し私の  
思考回路が柔軟でしたらあなたを十分  
に楽しませるお相手になれると。

哲朗 こんなに長い旅だなんて思っていなか  
った。やっぱりあのと引き返すべき  
だったんだ。

フネ こんなことを聞いても慰めにもならな  
いかもしませんが、すでに3年が経  
過しています。

哲朗 3年？ ついこの間出発したばかりじ  
やないのか。

フネ いいえ、3年経ちました。

哲朗 そうだったのか・・・。

フネ 時間というものは意識的なものです。  
つらい経験は1分が1時間にも感じる  
でしょう。逆に楽しい事はあつという  
まに時間が進む。だからあなたの気の  
持ちようで12年なんてあつという間  
です。

哲朗 あつという間？

フネ そうです。あつという間です。

哲朗 ・・・・どこかに途中で着陸するところ

はないのか。とりあえず外の空気が吸いたい。

フネ 中継地点はありません。ここから一番近いところがモクテキチなのです。このまま飛び続けます。

哲朗 冗談のひとつもいえないようなこんな機械と12年か。吐き気がするな。

間。

哲朗 ごめん、悪かった。

フネ ……。

哲朗 すまない。何かしゃべってくれ。な、黙らないで何とか行ってくれ。独りだ。とどろきかたまってしまいそうだ。

フネ ナビゲートを続けましょう。いいですね。なるべく楽しいことを思い浮かべてください。楽しいことですよ。いやな記憶は思い出さないようにするのです。インパクトの強いイメージはどうしても再生されてしまいますから。

哲朗 わかった。いつもやってることだ。

フネ ええ。では行きます。レジュームします。

## 6場 病院

哲朗が部屋に入ってくる。

眠っている彼女の枕元にプレゼントを置く。

哲朗、香織をじっとみつめる。

香織 お父さん？

哲朗 あ、ごめん、起こしちゃったね。

香織 うん。

哲朗 まだ苦しいか。

香織 だいぶ楽よ。もう発作も慣れちゃった。

哲朗 メリークリスマス。

香織 これ？ プレゼント？ ありがとう。

いつも忘れないでいてくれて。

哲朗  
・・・。

香織 私もあるのよ。とって。その引き出しの中。

哲朗 引き出し？

香織 そう、引き出し。

哲朗 これか。

哲朗はリボンのついた真つ赤な小さな箱を手取る。

哲朗 開けてもいいか。

香織 うん。

哲朗は箱を開ける。

哲朗  
・・・。

香織 前から選んでたの。でもお父さん禁煙始めたって言うし。

哲朗 香織が喘息なのに吸うわけにはいかないよ。

香織 いいの。アクセサリーにして。

哲朗 アクセサリーね・・・ありがとう。

香織 先生がね。調子がよければお正月はうちに帰っていいって。

哲朗 うん。・・・お正月は一緒にな。・

香織 ボビーの世話は。

哲朗 大丈夫。ちゃんとやってるよ。ボビー香織に会いたがってるぞ。こんどここに連れてこよう。

香織 病院だからペットは駄目なんですよ。しかられるわ。

哲朗 かまうもんか。鞆にかくして連れてくるよ。

香織 お父さん、お酒ください。

哲朗 そうか、すまん。むりやり飲まされてな。プロデューサーのやついい気になもんだ。父さん、どうしても抜けられなくてな。

香織 お父さんのドラマみてるよ。

哲朗 はは。意地悪な役ばかりだろ。

香織 わたしの好きな竹ノ内君あんまりいじめないで。

哲朗 (笑う) わかった。そうするよ。

香織 お母さんは。

哲朗 先に帰ったよ。今日はもう遅いし。あした一番で来るって。

香織 そう。

哲朗 ……。

香織 ごめんね、お父さん。

哲朗 なにがだ。

香織 今年こそは家族一緒にクリスマス祝おうって言うってたのに。

哲朗 ……。

香織 お父さん、クリスマスとか誕生日とかイベント大好きでしょう。

哲朗 ああ。昔はよくやってたなあ。ケーキを買って歌を唄って。香織が元気になったら絶対にやるう。

香織 うん。約束ね。

哲朗 ああ(言葉が詰まる)約束だ…香織。

香織 ……?

哲朗 香織はお父さんのこと好きか。

香織 うん。

哲朗 お父さんも香織のことが好きだ。世界中で一番好きだ。

香織 ……。

哲朗 今日はずいぶん酔っ払った。おやすみなさい。

香織 おやすみなさい。

ピッピッピという心拍計の音。

あわただしい病室の音。

哲朗 香織、がんばれ。約束したろ!

がんばれ! 死ぬんじゃない。死ぬんじゃない!

ピーと言つ音。

哲朗 ああ！

7場 フネの中

哲朗 香織！ 香織！。

(しくしくと泣いている)。

フネ あれだけ注意したでしょう。悪いことを考えては駄目です。

哲朗 ……。

フネ 娘さんを死なせてしまった。いいですか。この夢はあなたの勝手な想像なのです。

哲朗 勝手な想像？ そんなはずはない。あれは想像でも幻でもない。現実起きたことだ。

フネ お嬢さんは元気にお過ごしです。先にモクテキチに行かれています。

哲朗 俺ははつきり見たんだ。香織の呼吸が止まって、白い布が被されて、棺おけにいれられて真っ白な骨になって出てくるまで。はつきり全部覚えてるんだ！。

新たなる空間。

フネ はい……。航海時間を正確に伝えたのがいけなかつたようです……今は通常の2倍の安定剤を投与してます。精神の快復は全くみられません。このままではモクテキチまで持つかどうか……。はい、分かっています。

娘さんの存在を消そうと思うのですが。

……

ええ、その点も考えてます。代わりに娘と同じくらいのキャラクターを投入

します。  
盲目の少女です……。  
はい、すでに非常プログラムに切り替えました。

## 8場

古びた公団住宅二階の一室。  
小さな鏡台。

哲朗は部屋の中央に寝ころがり、AMラジオを聴いている。

哲朗の枕元には空になった焼酎の瓶。  
哲朗の妻、良江は鏡台の前に座り化粧をしている。

ラジオから、流行歌が流れる。

良江、突然立ち上がりラジオを消す。

哲朗は起きあがり、ラジオをつける。

良江、再びラジオを消す。

哲朗はもう一度ラジオのスイッチを入れ、今度はボリュームをよりいっそう上げる。

良江、たたくようにラジオのスイッチを切る。

良江 うるさいよ！

哲朗 なんだと。

良江 ききたきゃ、イヤホンでもしな。いら  
いらするんだよ。

哲朗 ふん。

良江、髪をとかし始める。

哲朗、側にあったペットボトルの水を飲む。

台所に行き冷蔵庫の中をあさる。

哲朗 おい、今日はいねえぞ。

良江 ……。

哲朗 聞いてんのかよ。今晚はいねえって  
言ってるんだ。

良江 勝手にしな。どうせあたしは仕事だよ。  
哲朗 ビールくらい冷やしとけよ。この尼。

良江、髪をとかす手が止まる。

良江 ビールがどうかしたかい。

哲朗 ビールのひとつくらい冷やしとけて  
いったんだ。

良江 ビールつてもんは仕事の後に飲むから  
うまいんだ。仕事もろくにしないでな  
にえらそうに。

哲朗 なんだと。

良江 この役立たずが……。

哲朗 いまなんていった。

良江 この役立たずが！つていったんだよ。  
一日中、ごろごろ寝てるだけじゃねえ  
か！ このインボやろう。

哲朗 この尼！ こんどは許さねえ。

哲朗、良江につかみかかる。

良江 ああ、やってやろうじゃねえか。

哲朗 この野郎、怪我させられてえのか。

哲朗、良江の上に乗りがかり、殴る  
うとする。良江は必死で抵抗する。

ピンポンとベルの音。

良江 畜生！ 畜生！

哲朗 この口が悪いんだ。くそ尼。

再びピンポン。

二人、もみ合う。

ドアをノックする音。

佐伯の音がする。

佐伯 哲っちゃん。何やってるんだ。開ける  
よー

二人はまだ、もみ合っている。

佐伯 おい、哲ちゃん。外にまる聞こえだぞ！

二人はお互いに離れ、衣服の乱れを直す。

哲朗はドアを開ける。  
スーツ姿の佐伯が現れる。

佐伯 相変わらず、派手だな。

哲朗 ああ。

佐伯 奥さん、こんにちは。

良江 佐伯さん、イヤだわ。(髪の毛をわててとかしながら)先にお電話をくださればよろしかったのに。

佐伯 いや、そうしたんですがね。どうもうまくつながらなくて。

哲朗 まさか。(電話のところに行き、受話器を耳につける)・・・(良江に)お前、あれだけ言っただろ。

良江 何だよ！ あんたがいけばいいだろ。どうせ寝てるだけなんだからさ。

佐伯 奥さん？！

良江 ……。

哲朗 まあ、(ちゃぶ台を出しながら)あがつてくれよ。良江、茶。

良江 (不機嫌に奥に入る)

哲朗 座布団。おかしいな。(探す)あつたんだけどな。

佐伯 いいよ。このままでいいよ。

哲朗 ああ、あつたあつた。・・・ちょっと暗いか。

哲朗は蛍光灯のスイッチを入れる。  
2本ある蛍光灯の一つはチカチカと点滅してつかない。

哲朗 あいつ、蛍光灯も取り替えてない。

佐伯は部屋中を見回している。



哲朗 まあ、座れよ。どうした、急に。  
佐伯 うん。まあね。

哲朗 良江！ 茶まだか！ 早くしろ！

良江、台所から顔を出す。

良江 すみません。お茶葉切らしてまして。

哲朗 何だと。

良江 今買ってきてますから。

良江、玄關に向かう。

佐伯 奥さん、気をつかわないでください。

哲朗 お茶くらい、用意しとけ。

良江 ……。

哲朗 早く行け。

良江 (にらむ) ……はい。

良江、激しくドア閉め、出てゆく。

哲朗 全く……すまん。変なところみせちゃって。

佐伯は再び部屋を見回す。

哲朗 あまりに何にもないからびっくりしたろ。

佐伯 まあね。

哲朗 なにもテレビまで持ってかなくなっただってな。

佐伯 電話もつながらない。…そんなにたいへんなのか。

哲朗 電話は違う。良江が振り込みに行くのをめんどくさがったただだよ。昔はあんなんじゃなかったのに。

佐伯 ……。

哲朗 なんか飲むか？ といってもろくなものはないんだが。

哲朗、奥から焼酎の瓶を取り出す。

哲朗 どうだ？ まだ早いけど。

佐伯 いいよ。お茶を待つよ。

哲朗 そうか。それもそつだな。

哲朗、瓶をしまい、再び佐伯の前に座る。

哲朗 それで？ あ、すまん、灰皿な。（探す）

佐伯 例の仕事の件だけだな。あれ、どうする。

哲朗 ああ、あれか。

哲朗、佐伯の前に灰皿を置く。

佐伯、たばこに火をつける。

佐伯 プライドが許さないかもしれないが、とりあえず、な。先方も是非、哲つちちゃんについていつてる。

哲朗 ……。

佐伯 週に2回、2時間顔を出してくればいい。そのくらいなら仕事に差し支えないだろう。

哲朗 ……。

佐伯 どうだ。

哲朗 俺にも一本くれ。

佐伯 お前、たばこ辞めたんじゃないのか。

哲朗 ああ、辞めたよ。くれ。

佐伯は、哲朗にたばこを差し出す。  
哲朗はたばこに火をつけ、大きく吸込む。が、せき込んでしまう。

佐伯 大丈夫か。

哲朗 神崎哲朗も落ちたもんだな。

佐伯 誤解してもらったら困る。俳優としての仕事じゃない。講師としてだ。

哲朗 講師ね。

佐伯 もちろん報酬は安い。俳優としてのギヤラがこんななんだったら断わって当然だ。でも、これは違う。あくまで講師としてなんだ。

哲朗 俺はまだ現役を引退した訳じゃない。

佐伯 そうだ。その通りだ。でも、後輩を育てていくっていうのも先輩役者としての役目じゃないのか。

哲朗 それは落ちぶれた奴のやることだ。

佐伯 ……週に1回ならどうだ。先方はそれでもいいと言ってる。

哲朗 栄治よ。はつきり言えよ。本当は今の俺をみて、哀れに思ったんだろ。それで講師の話なんか持ってきたんだろ。

佐伯 ……。

哲朗 まあ、みでの通り金がないことは事実だ……。だからといって若い頃みたいにコンビニでアルバイトってわけにもいかないだろ。早速週刊誌に捕まるだろう。俳優、神崎哲朗の末路。5年前の映画製作失敗のつけ。借金地獄！哀れ、コンビニでアルバイト……。か。佐伯 だったら講師の件、いい話じゃないか。哲朗 (見つめる) ……そうだったのか。俺のことをそんなに考えてくれたのか。ありがとう……。とても言うと思っただか。駄目だ。冗談じゃない。お断りだ。

問。

佐伯 わかった。この話は断っておく。ほら、あそこの校長、俳優座の先輩だね。昔世話になってな。どうしても言うもんだから。しかし、お前がそこまで言うんならしかたない。この話、なかったことにしてくれ。

良江が帰ってくる。

佐伯 奥さんすみません。ほんとに。

良江 いいんですよ。ゆっくりしてゆっくり  
ください。それよりすみません、なにも  
なくて。

哲朗 ずいぶん早かったじゃねえか。

良江 向かいの奥様が分けてくださったの。

哲朗 ついでにお茶菓子までいただいたのよ。  
また乞食みたいなまねしやがって、茶  
葉くらい買えるだろ。

良江 あんたが急げっていったからじゃない  
か！

佐伯 ……。

良江、奥に去る。

佐伯 あんまり、つらく当たるなよ。

哲朗 そうみえるか。

佐伯 ……。

哲朗 あいつにはこのくらいいいんだよ。

佐伯 奥さん、働いてるんだってな。

哲朗 ああ、スナックでな。

佐伯 ……。

哲朗 確かに、俺は今、売れてない。しかし、  
仕事がないわけじゃない。やるうと思  
えばいくらでもある。でもな、昔とは  
違う。ちゃんと選んでいきたいんだ。  
そのためにここまでがんばってきたん  
だ。

佐伯 わかってるよ。

哲朗 本当にわかってんのか。

佐伯 もちろんだ。

哲朗 だったらどうして、俳優養成所の講師  
なんてさせようとした。

佐伯 ……あれはさっきも言ったように  
先方に義理があつてな。…気にさ  
わつたんなら、すまん。

良江、佐伯と哲朗にお茶をいれる。

そして奥の部屋に去る。

哲朗 あいつ、この前、首にキスマークつけてきやがった。

佐伯 奥さんがか。

哲朗 ああ、まったく何をやってんだか。

佐伯 水商売だからな。いろいろあつて当然だろ。絡んで来る客も多いだろうし。それにあの美貌だ。

哲朗 美貌?・・どこがって感じた。

佐伯 そうだ、忘れないうちに渡しておく。

(懐から封筒を出す)

哲朗 悪いな。

佐伯 哲っちゃん。もう、これが最後だぞ。

これ以上はどうしようもない。

哲朗 ああ、分かってる。

佐伯 俺はお前のパートナーとして長年仕事してきた。哲っちゃんのためだったらなんでもした。そつだろう。

哲朗 ……。

佐伯 哲っちゃん。実は今日ここに来たのは……まあ、これを見てください。(鞆から書類を出す)

哲朗 ……。

佐伯 今度うちの事務所にきた仕事だ。一年間の連ドラだ。それはその企画書だ。

哲朗は渋々と書類に目を通す。

哲朗 すげえ。帝ドラじゃねえか。

佐伯 そうだ帝国ドラマだ。それだけじゃない。うちにオファーがあつたのはその主役だ。

哲朗 帝ドラの主役!

佐伯 社長はうちの若手、八木健太郎について言っている。

哲朗 ……健太郎か。売れっ子だな。まったく。

間。

哲朗 で、そんな話なんで俺に。

佐伯 ……。

哲朗 健太郎は帝ドラの主役で、俺には俳優養成所の講師か。俺がここ2、3年事務所の仕事を断ってきたからこのざまだっつていいたいのか。

佐伯 だから。

哲朗 そりやお前には感謝してる。でもな、やれるものとやれないものがある。

佐伯 今から話す。

哲朗 健太郎を見習えっつていいたいのか。態度を改めろっつて言いたいのか。若いときみたいに、へいこら頭を下げて、一からやり直せっつか！俺にだっつてプライドって物があるんだ。

佐伯 だから聞けよ。

哲朗 なにを聞けっつていうんだ。

佐伯 この仕事を哲っちゃんに回す。哲っちゃんにやっつてほしいんだ。

哲朗 なんだっつて。

佐伯 健太郎にはまだこの話はしていない。この仕事は哲っちゃんに回す。プロデューサーには俺が口説く。だからお前も了承してくれ。

哲朗 ……健太郎と俺じゃあキャラがちがうじゃねえか。

佐伯 キヤスティングなんてどうにでもなること知ってるだろ。最近の哲っちゃん、気に入った仕事じゃないとやっつてくれない。だから若手の八木健太郎に回っただけなんだ。制作サイドも使いやすいしな。

この仕事も最初のオファーは哲っちゃんにっつてことだった。でも、もし、哲っちゃんが断りでもしたら社長の面子は丸つぶれた。2年前、途中降板した前科があるだろ。社長はあれが怖いんだ。

哲朗 まだそのこと言うかな。あれは、内容がひどすぎたんだ。しかもひどいスタツフだ。最初から言っつてるだろ。コメ

ディーやるんだったらそれでも構わない。でも俺はちゃんとしたドラマがやりてえんだ。それを・・・ふざけやがって。

間。

哲朗 帝ドラの主役だったら断る奴なんていないよな。

佐伯 ああ、普通ならね。

哲朗 ? 普通ならってなんだ。

佐伯 企画書を読んでくれれば分かるんだが、今度の役は特別なんだ。

哲朗 特別?

佐伯 ああ、特別だ。

哲朗 何が?

佐伯 顔が出ないんだ。

哲朗 顔がでない?

佐伯 主役はいつさい顔がでない。顔面SF X 特殊メイクだ。まったく誰だかわからない。

哲朗 なんだって。

佐伯 しかも、台詞はまったくくない。

哲朗 それが主役か。

佐伯 主人公は、幼い頃、顔にひどいやけど負ったという設定だ。原型をとどめないくらい恐ろしい顔になってしまった。そういう役だ。

哲朗 はは。ははは。(笑う)

佐伯 ……。

哲朗 やっぱりそうか。そりゃそうだ。まともな俳優なら断るよな、顔が分からないうんじゃミッキーマウスのぬいぐると同じだもんな。帝国ドラマの主役だつて? おかしいと思つたよ。

佐伯 哲つちゃんにこれをやって欲しい。

哲朗 講師の次はぬいぐるみか。健太郎にやらせりゃいいだろ。もちろん健太郎もやらねよな。そんな役。

佐伯 哲つちゃん。顔は分からなくてもいい

じゃないか。役者として仕事ができる。俺はいままでひどい仕事を持ってきた。すまないと思ってる。でもこれは違う。もう一度ちゃんと企画書を読んでみてくれ。これを機会にまた一緒に仕事をしたいんだ。役者としての哲っちゃん  
と。

ピンポンと何度もなる。

哲朗 良江！ 出るよ！ 良江！ まいったな。

八郎 哲っちゃん！ いるの？ みんな集まってんだよ。早く来いよ！ 今日はずげえぞ。小宮山の奴、こんなでかいの釣ってきてな。いま、さばいてんだよ。

佐伯 誰だ？

哲朗 近所の友達だ。

八郎、部屋に入ってくる。

八郎 なんだ、お客さん？

哲朗 今事中なんだ。悪いけど、今日はいけそうにない。

八郎 えー。まじかよ。

哲朗 悪いな

八郎 そりゃないぜ。まえまえから約束してたじゃないか。今日だってさ。

哲朗 今日？ なにが。

八郎 ええ！ 忘れちゃったのかよ。ほら、ママの友達の、なんていったかな。昔から哲っちゃんのファンでさ。わざわざ栃木から出てきたんだよ。哲っちゃんに会うためにだよ。

哲朗 そうだそうだったっけ。あれって今日だっけ。

八郎 あれ？ やっぱ忘れてんの？ ひどいじゃない。せっかく哲っちゃんの好きな焼酎も用意してるのに。

哲朗 そうか。まいったな。（佐伯に）どう



しよう。

佐伯 まだ、大切な話が残ってるんだ。重要な話だ。

八郎 哲っちゃん。ちょっとだけでも顔出しなよ。それでママの顔も立っしぎ。

哲朗 じゃ、挨拶だけな。(佐伯に) 2, 3分で戻るよ。そこ出たとこの角だから、すまん。

八郎 ええ！ 2, 3分かよ。

哲朗 今は仕事なんだって。乾杯だけな。後でとことんつき合うから。どうせ一晩中飲んでるだろ。

(佐伯に) すまん、ほんのすぐ近くだから、すぐにもどるから。

佐伯 ああ。

哲朗、八郎についていく。

奥の部屋からすっかり夜のメイクをした良江が現れる。

良江 佐伯さん、ごめんなさい。私、もうすぐでかけないといけないから。あのひとあやってサービス精神だけは旺盛で。馬鹿みたいでしょう。

佐伯 それが彼のいいところです。

間。

佐伯 お店、たいへんですか。

良江 え？ ええ。・・・でもこれでおしま

い。

佐伯 おしまい？

良江 そう、辞めるの。

佐伯 お店をですか。

良江 お店だけじゃなくて、何もかもです。

佐伯 何もかも？

良江 そう、何もかもです。

佐伯 ……。

良江 佐伯さん。私、あの人と別れようと思ってるんです。

佐伯 え。

良江 私、あの人の下積みのところからしつて  
るわ。あの人の今までの苦労や努力、  
理解してきたつもりでした。あの人に  
は夢があった。あの人の夢、自分が監  
督をして主演をして映画を作る。その  
夢を語る姿が魅力的だった。だから結  
婚したのよ。でも香織が死んで。

ピーというブザーの音。

良江 ……でも結果は借金山。世田谷の  
家は抵当に入るし。あんなに親切にし  
てくれたスタッフも今じゃ知らん顔。  
今では、家でごろごろの飲んだくれ。  
アル中おやじよ。

佐伯 ……。

良江 このままじゃあの人駄目になると思っ  
んです。佐伯さんも今のあの人をみて  
れば分かるでしょ。あの人プライドば  
かり人一倍強いし。

佐伯 ……。

良江 もう、私、ここにはもどりません。あ  
の人もどつてきたらそう伝えてくだ  
さい。

佐伯 どこにいくんです。

良江 知り合いのところ。

佐伯 知り合い？…今、ですか。

良江 はい。

佐伯 もう帰ってこないんですか。

良江 はい。そのつもりです。

佐伯 何も今でなくてもいいでしょう。

良江 いつ出ていくか、ずっと迷ってたんで  
す。ちょうど今日は佐伯さんもいらし  
たことだし。いい機会だと思つて。

佐伯 僕がきつかけですか。まいったなあ。

良江 とにかくまえまえから決めてたことで  
すから。大きな荷物は少しずつ宅配便  
で送つてたし。

佐伯 ちょっと待ってください。あいつが帰

つてきて、奥さんいなかったら。シヨックでしょう。

良江 シヨック？ あの人が。まさか。

佐伯 どうして。シヨックですよ。

良江 あの人の私への態度、みればわかるでしょ。昔は優しくかったのに。

佐伯 もう一度考え直してくださいよ。お願いします。

良江 あの人、ずっと浮気してるんです。

佐伯 あいつがですか。まさか。

良江 ほら、あそこにかかっている上着、私には決して触らせないの。あの人の前で触れようものなら殴られるわ。

佐伯 上着をですか。

良江 あの上着だけは絶対に。異常なのよ。絶対に触らせない。

佐伯 何か大切な上着なんでしょう。

良江 浮気なのよ。

佐伯 え？

良江 おそらく、今夜会うのね。あの上着があそこにかかっているときは決まって外出するの。あの上着の内ポケットの中に手紙がいっぱい詰まっているの。それも女からの。あの人ひとりになるといつもそれを読み返しているの。

佐伯 彼も少し前はスターだったんだし、ファンレターの一つや二つ、いや、一時期は何百通も来てましたよ。

良江 そりゃそうでしょうけど。でも、あの上着の中身は違う。特定の女の手紙がはいってるの。

佐伯 でもそれが浮気とは。

良江 差出人はすべて同じ名前。

佐伯 手紙を見たんですか。

良江 中身までは見てないわ、おそろしくて。山口県、柳井市っていうところに住んでるらしいの。

佐伯 山口県？ 山口って、あの下関のある山口ですか。

良江 ええ。

佐伯 (笑う) それは違うな。

良江 どうしてです？

佐伯 だって、山口でしょ。いくらまめな哲  
っちゃんでも。

良江 私だって、名古屋で口説かれたのよ。  
それも都心とはずいぶん離れた田舎町  
だよ。あの人まめなのよ。毎日長距離  
電話してきてきて、君が必要だ。愛し  
てる。なんて言うのよ。だから信用で  
きないわ。

桐ヶ原綾子。この女もきつとそうよ。

佐伯 ……桐ヶ原綾子？ その女性はそう  
いうんですか。

良江 ご存じなんですか。

佐伯 え？ いや、桐ヶ原。珍しい名前です  
ね。…昔、ご主人の劇団に桐ヶ原麗  
子という女優がいたんですが。

良江 桐ヶ原麗子？

佐伯 ……ご存じない？

良江 ええ。

佐伯 そうですか。

良江 その桐ヶ原という女、あの人となにか  
関係あつたんですか。

佐伯 関係つて……事故のことは聞いてな  
いですが。

良江 事故？

佐伯 ご存じじゃなかったんですね。

良江 なんのことですか。

佐伯 そうですか。哲ちゃん言つてなかつた  
んですね。だったらいいんです。

良江 いったい、なんなんですか。事故つて  
なんですか。そこまで言つたんなら最  
後まで教えてください。

佐伯 いや、……そうですか。

良江 教えてください。なんのことなんでし  
ょう。

佐伯 ……当時僕らの劇団の若手公演、あ  
れは確か70年「霧のオンデュー」  
でした。その相手役です。桐ヶ原麗子、  
劇団内オーディションで大抜擢された

18歳の新人です。もちろん、主役はご主人でした。

良江 70年。ずいぶん昔ですね。

佐伯 はい。……。

良江 それで。

佐伯 リハーサル中に事故がありましたね。ミュージカルだったから哲っちゃん、相手役をリフトしてましてね。リフトというのは、こう、腰に抱いて回すわけです。それで手を滑らしまして、奈落に落としちゃったんです。別に哲っちゃんだけが悪かったわけじゃありませんです。奈落を操作していたスタッフ、照明、いろいろなミスが一度に重なりましたね……。

良江 それで。どうなったんです。

佐伯 死にました。

良江 え？

佐伯 内臓破裂で即死でした。

沈黙。

良江 その亡くなった桐ヶ原・麗子？さん。手紙の女、桐ヶ原綾子と？

佐伯 桐ヶ原なんて名前、そうはいないはずだし。親戚か。ご家族か、どなたかもしれませんね。確か年の離れた妹さんがいるとは聞いたことはありませんが。

良江 あの人、そんなこと、私にはなんにもこのことを話すのは我々仲間の間でもタブーでしたから。それに、あの事故の事はみんな忘れようとしてました。わたしだって、当時の関係者以外で話すのはあなたが最初だ。けれどももう時効でしょう。

良江 でも、わたしはあの人の妻なのよ。どうしてあの人は私にそんな重要なことを話してくれなかったんでしょう。

佐伯 さあ。……分かりません。私は独り者だし。

良江、大きな鞆を奥の部屋から運ぶ。

佐伯 やはり、出ていくんですか。

良江 はい。

佐伯 男の方のところですか。

良江 ええ。

佐伯 ……そうですか。

良江 店の常連さんで優しくしてくれるの。

60越えたおじさまよ。

佐伯 ……。

良江 あの人はずいぶん前に終わってますから。

佐伯 ……。

哲朗が帰ってくる。

哲朗 おう、ほらみる。ジャスト5分だ。ちゃんと帰ってきただろ。……わりいわりい。駆けつけ3杯ストレートでやってきたよ。まいった。もう回ってきた。

でもな。ただで帰ってきたわけじゃないぞ。ほら、みてみな。(懐からワインを出す)これ、くすねてきたんだ。これだったらお前もいけるだろ(笑う)

(良江をみて)おい。ワイングラスだせ。

良江 ……。

哲朗 早く出せよ。

良江 ……(台所に行く)

哲朗 どうした。なに突っ立ってるんだ。座れよ。

佐伯 ああ。

哲朗 これはいいワインだぞ。

佐伯 哲っちゃん。

哲朗 ああ、そうだ。つまみだ。つまみ買ってくれば良かった。

おい、良江！ なんか買ってこい！

佐伯 哲っちゃん！

哲朗 良江！

佐伯 哲っちゃん！ いいよ！ つまみはいらないよ。

哲朗 そうか。おい！ コルク抜きもってこい！

佐伯 哲っちゃん。

良江、ワイングラスとコルク抜き、

そしてつまみをもってくる。

哲朗 なんだ。わかってんじゃないか。

佐伯 ……。

哲朗はワインを開け、グラスにそそぐ。

良江は大きな鞆を持ち、玄関に向かう。

良江 佐伯さん。では。

佐伯 あ。

哲朗 おつ、がんばって稼いでこい。

佐伯 奥さん……。

哲朗 はやく、いけよ。

良江 さようなら。

佐伯 ……。

良江は去る。

哲朗 なにがさようならだよ。聞いたか今の言い方。さようなら。だってきどりやがつて。

佐伯 ……。

哲朗 まあ、乾杯といこうか。な。

二人は乾杯をする。

佐伯はワインを一気に飲み干す。

哲朗、それをみて驚く。

哲朗 それでなんだっけ。

佐伯 なにから話していいか。分からなくな  
った。

哲朗 さっきの話の続きだろ。講師の件はお  
断りだ。

佐伯 そんなこと、分かってる。・・・いい  
かよく聞け。

哲朗 どうした。そんな顔して。

佐伯 いや、仕事の話からしてしまおう。

哲朗 なんだよ。

佐伯 さっきの帝国ドラマの件。すぐに返事  
が欲しいんだ。

哲朗 すぐにか。ゆっくり考えたいんだ。

佐伯 駄目だ。今すぐに答えてくれ。やるの  
か、やらないのか。

哲朗 そんなに急ぎなのか。

佐伯 そうだ。明日プロデューサーとの会議  
がある。時間がないんだ。

哲朗 だったら・・・ノーだ。

佐伯 ・・・。

哲朗 俺には俺のやり方がある。いくら金が  
ないからって半端な仕事はしたくねえ。  
先方が、俺じゃないと駄目だっという  
役。そんな仕事じゃないとやる意味が  
ねえ。

佐伯 ・・・。

哲朗 いいか、俺は、ぬいぐるみ師じゃねえ。  
そんなもの20代の頃いやというほど  
やったよ。お客からたくさん拍手をも  
らってな。でも、その拍手というのは  
俺に対してじゃない。ミッキーマウス  
にだ。中で汗だくになっている俺にじ  
やないんだ。

もちろん、売れるまでにはなんでもや  
った。どんな役でもな。でもなんのた  
めにそれをやってきたんだ。いつか自  
分のやりたい役をやるためだ。いまさ  
らぬいぐるみみたいなまねできるか。

佐伯 哲ちゃん。

哲朗 それに、俺のファンはまだたくさんい  
る。おれが映画で失敗して借金を抱え



てるのもみんな知っている。だからこそ、半端なことではできない。顔にSF Xを施されて画面に出てみる。みんななんて言うと思う。ああ、神崎哲朗もおしまいだな。っていうに決まってるじゃないか。

佐伯　でも、悪い役じゃないんだ。もう一度企画書を読んでみてくれ。頭のあらしいところだけでもいい。読んでくれ。頼む。

哲朗　・・・今か。

佐伯　ああ、今だ。

哲朗、企画書をめくる。

良江が足早に入ってきて二人の前を通過する。

佐伯　奥さん・・・？

良江　忘れ物です。

再び、良江が二人の前を通過する。哲朗は気にもとめず、企画書を読んでいる。

良江、出てゆく。

佐伯　・・・。

哲朗　ストーリーはありきたりだが、まんざら悪くなさそうだな。

佐伯　え？・・・そうだろ。

哲朗　台詞はないんだろ。

佐伯　ない。

間。

哲朗　駄目だな。俺の仕事じゃない。

佐伯　哲ちゃん・・・。

哲朗　どう見ても健太郎のキャラだよこれは。俺みたいな中年のやる役じゃない。・・・お断りだ。

佐伯　哲っちゃん。もう一度・・・。

哲朗 お断りだっていつてるだろ。無理に  
おれにやらせるな。

佐伯 でも。

哲朗 お断りだ。

佐伯、再びワインを一気に飲む。

佐伯 やらせるよ。

哲朗 ……。

佐伯 無理にやらせるよ。

哲朗 え？

佐伯 無理にやらせるよ。無理にやってくれ  
よ！ なあ、無理にやってくれよ！

哲朗 栄治。

佐伯 ああ、そうだよ。この役は八木健太郎  
にきた役だ。お前にじゃない。それを  
俺は無理矢理お前にやらそうとしてい  
る。みんな反対している。事務所も、  
スタッフもプロデューサーもだ。でも  
俺はお前にやらせたい。俺はお前と一  
緒にずっとやってきたんだからな。哲  
っちゃんがぬいぐるみやってたころか  
ら頃からずっとな。

いいか。哲っちゃん、これは最後なん  
だ。俺の最後の頼みだ。

これは本当の最後なんだよ。

哲朗 最後？

佐伯 哲っちゃん、この仕事を断ると、もう  
俺は哲っちゃんの面倒をみれなくなる。

哲朗 どういうことだ。

間。

佐伯 社長がな。お前を切れっていうんだ。

今度の契約更新、止めようっていうん  
だ。この前の映画の負債、半分はうち  
の事務所にきただろ。それもあつてな。  
実は先ほど渡した金。お前の退職金だ  
って社長から渡された金だ。

もう20年近く一緒にやってきた仲間

だからな。社長も俺も・・・。  
でも考えてくれよ。こっちも食って  
かないといけないんだ。哲っちゃん  
夢にいつまでもつきあってられない  
だ。だからな。

是非、こんどの帝ドラだけは・・・。

哲朗 帰れよ。

佐伯 哲っちゃん。

哲朗 お前だけは俺のこと、わかってくれて  
ると思ってた。帰れ。帰ってくれ。

佐伯 哲っちゃん、俺だって、俺だって、考  
えて考えたんだ！

哲朗 出ていけ。出ていけよ。顔もみたくね  
えよ。帰れ！

佐伯 ……。

哲朗 お断りだ。帝ドラなんてくそくらえだ。

間。

佐伯 帰るよ。

佐伯、去る。

一人残された哲朗はワインをラッパ  
飲みする。

## 9 場

ピンポーンの音。

哲朗は床に寝ている。

再びピンポーンの音。

哲朗 栄治か。しつこいよ。

ノックの音。

哲朗 今はいないよ。神崎哲朗は出かけてま  
す。

綾子 あの。綾子です。桐ヶ原綾子です。

哲朗 え。

綾子 神崎さん？ お宅？ここでいいのでしょつか……。

哲朗 はい！ 今開けます。

哲朗、ドアを開ける。そこには白い杖を手にした盲目の美しい女、桐ヶ原綾子がいた。香織にそっくりだ。

哲朗 綾子さん。

綾子 こんにちは。いえ、もう、今晚はですか。

哲朗 (時計を見る) 待ち合わせは7時ですよ。しまった！ もう8時だ。

綾子 おうちにまで押しかけてしまってすみません。

哲朗 ごめんなさい。ちょっと立て込んでてしかし、よくここがわかりましたね。

綾子 ええ。

哲朗 遠いところを疲れたでしょう。どうぞ(手を引く)

綾子 いま連休中でしょう。帰りの新幹線、予定してたのがとれなくて。だからあんまりゆっくりできないんです。そのことを神崎さんに連絡しようとしたのですが、なぜか電話が通じないし、待ち合わせの時間を過ぎてもいらつしやらないからどうしようかと……。

哲朗 あ、電話。最近故障が多くて。ごめんなさい。本当にごめんなさい。

ああ、今、電気つきます。(スイッチを入れる) ああ、まだ取り替えてないんだ。(カシヤカシヤと何回もつけたり消したりする) 駄目だ。

綾子 電気は大丈夫です。私、あまり関係ないですから。

哲朗 そつか、そつですよ。

哲朗、綾子の手を引き、座らせる。

哲朗 すみません、これ座布団……。あの、

今、お茶入れますから。

綾子 構わないでください。私、ほんとにすぐに出ないといけませんから。表にタクシーも待たせてあるし。

哲朗 タクシーは僕が後で呼びますよ。待たせておくなんてもつたいない。

綾子 いえ、ほんとに。新幹線に間に合わなくなります。今日中に大阪につかなくてはいけなくて。今晚は友人の家に泊めてもらうことになってますから。

哲朗 そうですか。ゆつくりお話できると楽しみにしてたのですが。

綾子 すみません、私の都合で。あの、これ、(酒の瓶を渡す)どうぞ召し上がってください。

哲朗 すみません。いつも贈っていたいで。

哲朗、酒を押し入れの奥にしまう。

綾子 住所を頼りに伺ったんですけど、世田谷のおうちから引越されたんですね。

哲朗 ええ。

綾子 今度はマンションですね。

哲朗 マンション?・・・ええ。なんだか大きい家はさみしくて。ほら、子どもがいないし。

綾子 奥様は?

哲朗・・・手紙届きました。驚きましたよ。こんどはワープロが打てるようになったんですね。

綾子 恥ずかしいわ。漢字間違ったりするでしょう。パソコンで音声入力してるからうまく変換してなくて。

哲朗 大丈夫、ちゃんとあつてましたよ。

綾子 そうですか。よかった。便利になったもんですね。声でワープロですか。メカ音痴の僕でもできるんですかね。その音声入力とかなんとかで。

綾子 大丈夫だと思います。マイクでしゃべ

るだけです。神崎さん、声の仕事もやってみよう。でしたら絶対ですよ。私みたいになりがあたりするとどうしてもうまく変換してくれなかったりするんです。

哲朗 とんでもない。綾子さんはすごくきれいな発音ですよ。私なんかより数段うまい。

綾子 あらいやだ。神崎さんしらないだけですわ。私、友達の前では思い切り方言出ちゃうんです。

哲朗 へえ、信じられないな。

綾子 神崎さん、山口に帰った私をみたらきつとびつくりするわ。

哲朗 そうだったんですか。興味あるなあ。

間。

哲朗 スピーチコンテスト。うまくいきましたか。

綾子 緊張しました。

哲朗 そうでしょう。

綾子 まさか全国大会なんていけると思わなかったですから。でもこんなことでもないとめったに東京なんて来れないし。すごいですよね。僕には英語でスピーチということ自体信じられません。英語は中学の時に挫折してからずっとプレッシャーです。英語が話せるなんてうらやましいですよ。それで・結果はどうでした？

綾子 それが入賞したんです。

哲朗 ええ！ それはおめでとう。すごいな。それをはやく言ってくれないと。

綾子 私、あまりの緊張で2度も舌をかんじやったから、もう、入賞なんて。

哲朗 一生懸命がんばった甲斐がありましたね。ほんとうにおめでとうございます。

綾子 ありがとうございます。

綾子、鞆の中にある賞状の入った筒を出して見せる。

綾子 ほら、賞状までいただいたいちゃって。

哲朗 見ていいですか。

哲朗 ええ。

哲朗は賞状を広げてみる。

哲朗 僕も仕事があれば見に行きたかったな。昨日の夜からスタジオに缶詰でしてね。さっきやっと帰って来たんです。

綾子 あら、徹夜でしたか。すみません、そんな忙しいときに。

哲朗 いえ、いいんですよ。徹夜はしょっちゅうですから、慣れてますから。

綾子 私も神崎さんの舞台、見に行けたらいいいな。

哲朗 舞台ですか。

綾子 ほら、このまえ電話でそうおっしゃってたでしょう。今度ご招待してください？

哲朗 え？ もちろんです。もちろんですとも。ご招待しますよ。

綾子 うれしい。私、舞台というもの一度も観たことないから。もうすぐですよ。確か、来月からでしたよね。

哲朗 あ・・・そういいましたね。でもあれは東京公演だけです。こんど大阪に行くときは是非とも招待しますよ。大阪は遠いですが。

綾子 山口には来ないんですか。

哲朗 山口ですか。最近ほとんど行ってないですね。でも、もし近くに行くことがあったら、そのときは一番いい席を用意します。

綾子 本当ですか。

哲朗 もちろん。僕の声が一番よく聞こえる、最前列のど真ん中に。

綾子 楽しみにしています。

間。

綾子 神崎さん。今日はどうしても言わない  
といけないことがあるんです。

哲朗 なんでしょう。

綾子 私、今年で29になります。

哲朗 もう、そんなになりますか。

綾子 はい、それで、いままでいろいろして  
もらってすごくありがたく思ってます。  
うちは父がいなかったでしょう。だか  
らずいぶん助かりました。でも、姉が  
死んで今年でちょうど25年になるこ  
とだし。それで・・・。

もう、お金はいりません。送らないで  
ください。私、大丈夫。もう、大人で  
すから。

哲朗 どうして急に。

綾子 昨年の暮れ、母が亡くなって私、思っ  
たんです。なんて今まで他人ばかりに  
頼って生きてきたんだらうって。甘え  
てばかりいたなって。

私、目が不自由だし、母と二人きりだ  
ったから、みんなが親切にしてくれた  
んです。だけど、これからは自分の力  
でがんばってみたいんです。今まで、  
自分を応援してくれた人に恩返ししがし  
たいし、私、今日のコンテストに入賞  
してさらに自信ができました。自分の  
力を試してみたくなりました。

哲朗 それは前向きなお話ですね。お母さん  
が亡くなって気を落とされてるとばか  
り思っていました。安心しました。

・・・でも、それでは私の気がおさま  
りません。それより私が心配なのはこ  
れからのあなたの経済的な問題です。

綾子 大丈夫です。前より、ずっと裕福です。  
こんなことほんとうは不謹慎で言うべ  
き事じゃないんですけど。実は、母が  
生命保険、たくさん残してくれて。そ



れで、ずいぶん楽になりました。  
それに私、仕事を始めるんです。来月  
から広島で翻訳のまねことをやらせて  
もらえることになったんです。

哲朗  
翻訳？

綾子  
はい。広島大学の先生の紹介で、当分  
はアシスタントです。でも将来的には  
東京に出てきて私と同じ目の不自由な  
人のために働こうと思ってるんです。

間。

哲朗  
・・・しかし、私はまだ、あなたのお  
母様から許してもらっていません。

綾子  
・・・

哲朗  
お母様が入院されてから私は何度もお  
見舞いに足を運びました。でも一度も  
会ってはいくたさらなかった。とうとう  
最後の最後まで・・・私はどうした  
らいいのか分からない。私はいつたい  
いつになったら・・・。

綾子  
私はお母様とは違いますから。私は神  
崎さんのこと好きですから。

哲朗  
え？

綾子  
ええ。神崎さんのこと、好きです。

哲朗  
私の事、許してくださいさるんですね。

綾子  
許すも許さないもともとと神崎さんの  
ことそんな風に思ってますから。

哲朗  
・・・。

間。

哲朗  
綾子さん、僕と一緒に住みませんか。

綾子  
は？

哲朗  
こちらに住んだらどうですか。いずれ  
は東京にくるつもりなんですよ。だ  
ったらすぐにでも。

綾子  
え？

哲朗  
そうだ、そうしなさい。山口で一人で  
暮らすより。こっちで暮らした方が安

心でしょう。

綾子 奥様だっというしやるでしょう。

哲朗 奥様？ ああ、あいつは関係ないです。だから。

綾子 私、好きな人がいるんです。

哲朗 好きな人。

綾子 結婚なんか、まだまだの先の話ですけど。でもそうなるかもしれません。地元のYMCAで知り合っただんですけど。私の目の不自由なこと。それに、働くことにもすごく理解があつて・・・とにかく素敵な人なんです。

哲朗 そうですか。(笑)そういうことだつたんですね。

綾子 はい。だから一人じゃないんです。

哲朗 僕はどうしてあなたが急に、送金を止めてくれなんて言い始めたかと思つてました。恋人がいるんですね。わかりました。

綾子 ええ。

哲朗 でも、少しさみしくなるなあ。もう、綾子さんから手紙をもらえなくなるね。

綾子 どうしてですか。そんなことありません。前と同じように手紙書きます、書き続けます。私、今まで、手紙を書いたのはお金を送っていただいたお礼だけじゃありませんから。

哲朗 ありがとうございます。

綾子 神崎さんは、いつまでも私のお父さんでいてください。

哲朗 お父さん？ ですか。

綾子 失礼だったかしら。

哲朗 いえとんでもない。お父さん・・・ね。  
綾子 私、父がいなかったものですから。神崎さんのようなすてきなお父さんがほしかったんです。

哲朗 いや、うれしいです。いつまでもあなたのお父さんにしてください。

綾子 はい。ありがとうございます。

哲朗 こちらこそ・・・

綾子 私、神崎さんのお顔、よくは拝見したことはありませんが、噂はいつも聞いてます。友達からすごいハンサムな俳優さんだって聞いてます。知り合いだつて言つと、とてもうらやましがらます。

哲朗 ハンサムですか。まいったなあ。  
綾子 そうだ。こんど山口でも映るテレビ、出ることないんですか。みんなに自慢します。

哲朗 今は舞台が忙しいからね。テレビは今、関東地区ばかりだし。

綾子 そうなんですか……。

哲朗 そうだ。来年春からの帝国ドラマに出るよ。

綾子 帝国ドラマですか。山口でも映りますね。

哲朗 それも主役だ。

綾子 主役ですか。すごい！

哲朗 まあ、最初は、僕のイメージと違うんで断つただけだね。どうしてもってプロデューサーが頭を下げてきてね。

綾子 私、今、すごい人と話してるんですね。私ってすごいですね。みんな、きつと驚きます。

哲朗 いや、大したことないよ。帝ドラなんて。

綾子 もう、撮り始めてるんですか。

哲朗 いや、来月……からかな。

タクシীরクラクションがなる。

綾子 あら。もう、行かないと。運転手さんに10分経つたら教えてくれるように頼んだんです。

哲朗 残念だな。詳しくはまた、電話しますよ。それとも手紙の方がいいかな。

綾子 電話がいいです。手紙だと他の人に読んでもらわないといけないし。神崎さんがお手問じゃなければ、なんですけ

ど。

哲朗 電話しますよ。手紙を書くのはは  
どうも苦手でね。いや、もらうのはうれ  
しいんだよ。

綾子 はい。

哲朗 外まで一緒にしましょう。

綾子 ありがとうございます。でも、私、大  
丈夫。神崎さんはここにいてください。  
哲朗 そういっわけには、足下だつて危ない  
し。

綾子 平気です。それに外は人が通ります。  
まさか俳優の神崎哲朗さんがここに  
いることがわかったら困るし。

哲朗 え……。

再び車のクラクションが鳴る。

綾子 私は、ここでいいです。

哲朗 そうですか……。

綾子 ではまたね。今日はおうちまで押し掛  
けてきてすみませんでした。

哲朗 いいえ、またいつでも。

綾子 さようなら。

綾子、去る。

神崎、ため息をつき再びワインを飲  
む。

企画書をながめる。

哲朗 ……。

神崎、いつしか声を上げて泣いてい  
る。

10場

フネ いけませんね。

哲朗 どうしても俺にはできなかった。

フネ ここは仕事をもらうんです。そしてあなたは再びスターへ返り咲く。

哲朗 ……。

フネ まいりました。

哲朗 しかし、私のプライドが許さないんだ。どうしても半端な仕事はできないんだ。

フネ ……。

哲朗 モクテキチはまだか。もういやなんだ。こんなゲームを繰り返すのは。

11場 モクテキチ

機械的なブザーの音。

フネ 到着します。準備はよろしいですね。

哲朗 長かったな。もうたくさんだよ。

フネ 着陸姿勢をとってください。10秒後に着陸します。

衝撃。

フネ システム異常無し。無事着陸しました。着陸姿勢をくずしてもかまいません。

哲朗 ベルトははずしていいんだね。

フネ しばらくお待ちください。いきなり外に出られますと、船外の環境に体が馴染みません。

哲朗 もういい。早くここから出してくれ。

フネ 急に外にでられますと高山病のような症状がでてしまいます。最悪の場合死に至ることもあります。もうすこし辛抱を。

ピピピとブザーの音。

フネ お迎えの方がいらつしゃいます。ここにお通ししましょう。その間に私は環境の調整を終わらせておきます。

哲朗 お迎え？ 私に？。

フネ お会いになりませんか。

哲朗 誰？

フネ 綾子さんが見えてますが。

哲朗 綾子？ もしかして桐ヶ原さんのこと？

フネ はい、そうです。

哲朗 まさか……。

フネ どうしますか。お通ししますか。やめますか。

哲朗 いや、通してくれ。早く。

フネ わかりました。ではゲートを開きます。

ゲートが開く。

綾子 神崎さん！。

哲朗 綾子さん！ どうして。

綾子 神崎さん。私、もう会えないかと思いました。先日、来訪者のリストを見てね。ここに来ることを知って驚ろきました。

哲朗 目がみえるんですか。

綾子 ええ、すっかり。ここでは病気はありませんもの。

哲朗 奇跡だ。ほんとに綾子さん。まさか幽霊じゃないよね（綾子に手を伸ばす）。

綾子 いや。

哲朗 どうしたの。

綾子 まだ、私に触れないほうがいいと思う。神崎さんまだこの環境に慣れてないから。

哲朗 そつ。……すまなかった。僕は自分に弱かったんだ。だからこういう形で再会しかなかった。

綾子 知ってる。神崎さんがんばったの。しってるわ。

綾子 すまなかった。本当に。

哲朗 私ね。こんどやっとひとりで通訳の仕事させてもらうことになったの。こんどはお手伝いじゃないの。

綾子 そうか。それはよかった。

間。

哲朗 そうだ香織は？ 娘の香織とは会わなかったかい。

綾子 香織さん。・・・お嬢様ね。ええ。

哲朗 本当！

綾子 お会いになる。

哲朗 来てるのか。

綾子 ええ。ここまで一緒に。

哲朗 一緒に？

綾子 いきなりだと驚かれると思って最初に私が。

哲朗 早く会わせてくれ。私まだここから出られないんだ。

綾子 わかった。呼んでくる。ちょっと待ってて。

ゲートの開閉の音がして、香織が現れる。

哲朗 香織。

香織 父さん？ ほんとにお父さんなのね。

哲朗 ぜんぜん年とってない。

哲朗 おまえもだ。全然変わらない。

香織 うん。

哲朗 おまえに会えるのを心待ちにしてたよ。

香織 お父さん、私、ずっとひとりで寂しかった。

哲朗 すまなかったな。どうしてもやむにやまれぬ事情があつてな。はやく来よう来ようと思つたんだが。

香織 いいの。今こうして会えたんだから。

哲朗 ああ。

香織 独りで来たの？

哲朗 そうだよ。結構長い旅だった。疲れた

よ。(笑う)。

香織 また一緒に暮らせる？

哲朗 もちろんそのつもりで来たんだ。

香織 リストにお父さんの名前を見つけてか

ら私、すぐに一緒に住める部屋を探したわ。

哲朗 ありがとう。

香織 早く昔のようになれるといいね。

哲朗 うん。昔のようだね。・・・そっだ。

ポビーは？ ポビーはどうした？

香織 ポビー？ 外人？

哲朗 ポビーだよ・・・。ポビー。

香織 ポビー？

哲朗 ・・・・いや、いいんだ。なんでもない。

香織 へんなの。

哲朗 ・・・・綾子さんは？ 綾子さんはどこにいったの？

香織 外でまってるわ。

哲朗 外で？

香織 呼んでこようか。

哲朗 うん。

香織 ちょっと待っててね。

ゲートの開閉の音。

哲朗 綾子さん。

綾子 どうしたの。

哲朗 香織は？。

綾子 外ですけど。

哲朗 なぜ一緒じゃないんだ。

綾子 え？ どうしてかしら。

哲朗 君はほんとに綾子さん。

綾子 え？

哲朗 目の不自由な君がこんなに回復するなんておかしくないか。

綾子 どうしたの、神崎さん。

哲朗 こんな的茶番だ。くだらない。

綾子 神崎さん！

哲朗 もう止めてくれ！

ピー。というブザー音。



フネ 駄目でしたか。

哲朗 おかしなことばかりだ。綾子さんの目が見える。それに香織が生き返るなんて。おまけに香織はボビーを知らない。ボビーはオプションだからか。

フネ あなたはとてもひねくれている。どうして私のストーリーに素直に従ってくれないのですか。どうしてマイナスの方向ばかりを向くのですか。

哲朗 私にどうしろというんだ。私は努力してるんだ。楽しいこと、楽しいこと。楽しいことなんてあるか。このフネに乗るまで一度だって楽しいことなんてなかった。そうだろ。おまえだってそうだろ。

フネ ……この次は複数の人が同時に出てこれるようにカスタマイズし直します。ですからもういちど。

哲朗 もういい。眠りたくない。ずっと起きてる。夢なんかみたくない。・・モクテキチまで後どのくらいある。

フネ ……。

哲朗 どのくらいだ。教えて。

フネ 1・8光年です。時間にすると10年と10ヶ月です。

哲朗 これじゃ拷問だ。

フネ ……。

哲朗 疲れた。もう疲れた……。

新たなる空間。

フネ はい……待ってください！ もう一度だけやらしてください！……はい、承知してます。……はい。

彼はいよいよ衰弱していった。私は困った。彼が死んだ娘に再会すること意外、彼の精神状態を回復させる手段を思いつかなかったのだ。そもそも、娘

さんと盲目の彼女をいちどに出したことは失敗だった。これは私のミスだ。彼の精神状態はとても手に負えない。私は焦り過ぎていたのかもしれない。焦るということ。困るということ。それは私の中でいまだかつて経験したこととの無い感情だった。・・・非常プログラムに切り替えて確かに私の中にも変化が起きていた。そもそも運行マニュアルにある非常プログラムとはいいたいなんなんだろう。私に物語を創造する力を与えてくれるプログラムのことなのだろうか。・・・とにかく、私は今ある問題の解決、彼の健康回復をするための推論エンジンを走らせるしかなかった。

暗転。

### 13場 病院

哲朗の周りに、フネ、香織、良江、佐伯がいる。

哲朗　ここは。

フネ　気がつかれましたか。

哲朗　あなたは。

フネ　医師です。

哲朗　ということは・・・。

フネ　ここは病院です。あなたは眠っておられました。15年間ずっとです。

哲朗　私は・・・。

香織　お父さん。

良江　お父さん。

哲朗　香織、良江？

良江　奇跡ね、今日は素晴らしい日よ。

佐伯　哲ちゃん。

哲朗　栄治！

佐伯　寝坊がすぎるぞ。哲っちゃん。こんな

んじゃ仕事キャンセルになるよ。

良江 佐伯さんね。ずっと来てくれてたのよ。

フネ ここ数日脳波が活発になってましたからね。もしかして目が覚めるかもしれないってみんな集まってたんです。

香織 ほんと白雪姫みたい。

哲朗 香織、おまえ。

香織 ごめんなさいお父さん。あんな悪ふざけしなきゃよかった。

良江 香織ったら、死んだふりしてたのよ。

あなたがかまってくれないから。ほんとに馬鹿なんだから。

香織 まさかあんなに大騒ぎになるとは思わなかったんだもの。

哲朗 それで私は……。

フネ 神崎さんは、香織さんが倒れてるのを見て、気を失なわれたみたいです。

良江 そうよ。あなたほんとおっちょこちょいなんだから

それで床に頭をつよくぶつけたらしくて。そしてそのまま。

哲朗 あの日から？……。

香織 そう、ずっと眠ってた。このベッドで15年間ずっと。

哲朗 ……いやな夢をたくさん見た。私はいままでいっぱいいいやなことがあった。それで我慢できなくなつて、地球を出ることにした。宇宙船に乗つて。

香織 宇宙船か。(笑う)お父さん、SF小説好きだったものね。

良江 かわいそうに。ずっとうなされてたわ。香織 ほんとにごめんなさい。全部私のせいなの。

哲朗 いや、俺が早とちりして……そうか。そうだったのか。

良江 でもよかった。あなたが目覚めてくれて。先生いままでありがとございませう。

フネ 私もほんとうれしいです。奇跡です。ほんとに奇跡です。

佐伯 哲っちゃん。みんな待ってるよ。撮ろう、映画を。もちろん主演は哲ちゃんだ。

哲朗 ああ。

良江 佐伯さん。主人をよろしく願います。

佐伯 奥さん、改まって。やだなあ。当たり前じゃないですか。やりますよ。どんな仕事をとつてきます。

哲朗 良江、おまえ、話せるようになったんだな。

間。

良江 話せるって？

哲朗 だって、香織が亡くなったショックでしゃべれなくなっただろう。

良江 香織はもともと元気ですもの。仕事だつてしてるんですよ。

香織 父さん、私は元気よ。

哲朗 香織、喘息の発作おこってないか。

香織 喘息？ いやだ。私、マラソンで国体にも出たのよ。大学も体育大学に進んで、今はね、福祉関係の仕事をしてる。

哲朗 そうなのか。

香織 ええ。

哲朗 信じられないな。

良江 そうだ。パーティーやりましょう。

あのときみたいに。

哲朗 あのとき？。

良江 そう。あのと時。あなたが香織の誕生日を一週間間違えた。

哲朗 そんなこともあったな。

香織 佐伯さん、先生も一緒に、いいでしょう。お祝いよ。

フネ もちろん。

佐伯 よし、快気祝いだ。早速やりましょう。

良江 決まったわね。

哲朗 ボビーは。

沈黙。

良江 そうそう、ボビーは病気でね。

哲朗 病気？

良江 去年死んじゃったの。

哲朗 ……。

香織 さあ、準備準備。私はクラッカーでも用意しよう。はでにパパパーンとならさなきゃ。お母さんは。

良江 そうね。とりあえず。

哲朗 ケーキだ。ケーキ食おうよ。

良江 え？ ええ、ケーキもいいわね。先生、ケーキは食べても平気ですか。

フネ ……いいでしょう。許可します。

香織 この辺に売ってるかしら。

良江 そうね。ちよつと遠いかもね。

佐伯 私が行って来ます。車で来てるし。

良江 すみません、お願いできます？

佐伯 香織さんも一緒にきますか。買い出し。

香織 ええ。

哲朗 ケーキはいい！ またどうせ見えないんだろ。

間。

良江 (一同、笑つ) さあ。準備よ。

哲朗 ボビーを連れてこい。

良江 ……だからボビーはもう。

哲朗 香織、ボビーを用意しろ、あの時と同じ風にやるんだ。

香織 ボビーって、犬よね。

哲朗 犬よね？ 犬よねってなんだ。

香織 だって。

哲朗 同じ種類でいいんだ。連れてこい。

香織 そう…わかった。

哲朗 同じ種類だぞ！ 分かるのか！

良江 あなた、怒鳴らないで。

哲朗 ボビーはどんな犬だ。言ってみる。種類は何だ。

香織 ……ラブラドル…レトリバー。

哲朗 用意できるんだな？。

香織 (良江を見る) たぶん。

フネ 病院内ではペットの持ち込みは禁止です。

良江 そうよ。禁止なのよ。

フネ 抵抗力のない患者さんの感染経路になりかねません。動物は絶対に駄目です。

哲朗 私は行く。ボビーをつれてくる。

哲朗、ベッドを降りる。

良江 駄目よ。まだ、安静にしないで。

哲朗 いやだ。どけ！ 俺は部屋から出るんだ。

フネ まだ検査が沢山あります。動き回ってはいけません！

みんなで哲朗を部屋から出るのを阻止しようとする。

良江 あなた！ やめて。

哲朗 わかってるぞ。この部屋の外は何もないんだ。その扉から出たら真っ暗闇だ。そうだろ。そこまで映像にできなかったんだろ。ここはどうせフネの中なんだ。私は夢をみせつけられてるだけなんだ。家族なんて最初からいないんだ。

香織 父さん、何を言ってるの。

哲朗はフネの首にかかった聴診器をとり、フネの首を絞める。

フネ なにをする。

哲朗 いいか。おまえは死なないんだ。どうせおまえが作り出した世界なんだからな。

香織 お父さん止めて。

フネ 苦しい。

哲朗 苦しいか。だったら誰か、助けを呼ん

でこい。もしこの部屋が作り物でない  
本当の病院だったら。誰か来るだろう。  
さあ、呼べよ。香織、看護婦呼んでこ  
い。

良江 あなたもう止めて。この人、死んでし  
まうわ。

哲朗 頼む、良江、誰でもいい。誰か連れて  
きてくれ。誰でもいいんだ。香織、ど  
うして動かない。外に出て見る。ここ  
は病院なんだ。廊下に沢山人がいるん  
だろ。

佐伯 哲ちゃん、いい加減にしないか！

哲朗 やっと目が覚めたと思ったら。こんな  
ことして。みんなにいままでどんなに  
迷惑かけたと思ってるんだ！

哲朗 ……

哲朗、フネを離す。

皆、ほっと一息つく。

間。

哲朗 どうした。佐伯、買い出しに行つてく  
れるんじゃないのか。

佐伯 ああ、行くよ。

哲朗 さあ、早く。

佐伯 哲ちゃんはその前にゆっくり眠った方  
がいい。まだ疲れてるんだ。

フネ 安定剤をうちましょう。興奮もとれる  
でしょう。

良江 そうね。また目が覚めたときには準備  
ができてるわ。

哲朗 いやだ！ 絶対にいやだ。また眠らせ  
る気か。

フネ ……

哲朗、皆を見回す。

哲朗 やっぱり、このドアの外には何も無い  
んだ。

哲朗はドアにゆっくり歩み寄る。  
皆、それを見つめる。

ドアを開ける。

「ガシャ」という音と同時に、  
ピー。というブザー音。

14場 フネの中

フネ (嘆く) 非常プログラムには無理があるんです。メモリーが足りない。それに私には物語を創ることなんてできないです。

哲朗 嘆きたいのは俺の方だ。もう、気が変になりそうだ。

フネ 私はおかしいのかもしれない。

哲朗 ああ、そうだろうよ。おまえもおかしい。俺もおかしい。だからなんなんだ。こんな変な夢ばかり見せられて毎日毎日。

フネ ……。

哲朗 航海はあとのくらいあるんだ。

フネ 1.5光年。8年ほどあります。

哲朗 (落胆して) 8年。

フネ ……。

哲朗 モクテキチっていったいどんなところなんだ？

フネ モクテキチですか？

哲朗 そこにはなにがある？

フネ わかりません。

哲朗 行ったことがないのか。

フネ ありません。

哲朗 何だって！

フネ モクテキチに行ったフネは二度と帰って来ることがありません。そこで使命を終えるのです。ですからモクテキチがどのような場所かというデータはこの世には存在しません。

哲朗 それじゃあ、モクテキチが本当にある



かどうかもわからないじゃないか。

フネ 大丈夫です。この旅に失敗はありません。必ずモクテキチにたどり着きます。

哲朗 そんなことどうしていえる。

フネ もし、非常プログラムが上手く行かないとき、私には最終プログラムが用意されています。これを使えばどんな場合でもモクテキチに辿りつくことができます。失敗はありません。

哲朗 最終プログラム？

フネ これだけは知っておいてください。私は貴方だけのためのフネなのです。ですから貴方がモクテキチにたどり着かなければ私の存在価値はないのです。私は私のすべてをなげうってでも貴方をモクテキチまでおくりとどけなければなりません。それがわたしの任務だからです。

哲朗 それで任務を終了したら、おまえはどうなる。

フネ さあ。もう一度、出発点に戻るエネルギーは搭載されていません。おそらく私は止まってしまおうでしょう。

哲朗 死ぬのか。

フネ 死ぬという表現は適切ではありません。機能が停止するのです。

間。

哲朗 孤独を感じたことはないのか。

フネ 私がですか。

哲朗 そうだ。

フネ コドクですか・・・。

哲朗 所詮、機械なんだな。

コンピューターの検索するよつな音。

フネ 孤独・・・。

哲朗 孤独を癒すものって分かるか。

コンピューター音。

フネ わかりません。

哲朗 愛だ。

フネ アイですか。

哲朗 わかるか？

コンピューターの音。

フネ アイ。相手の幸せや発展のためにつくす暖かな気持ちのこと。ですか。

哲朗 私を愛せるか？

フネ あなたを。ですか。それは性の対象と  
いうことですか。それとも家族愛です  
か。

哲朗 そうではない。私にとってそんなもの  
は不毛だ。

フネ おっしゃることが理解できません。

哲朗 私を愛せるか。私を愛してくれる人は  
皆私の前から姿を消していった。私は  
愛されなかった。私は一人きりだった。  
ずっと。

フネ ……。

哲朗 この旅はきつと終わらない。そんな  
だろ。この孤独が続く限り私の旅は永  
遠に終わらない。

フネ ……。

哲朗 だから私を愛して欲しい。そうすれば  
私は何年この中に閉じ込められたとし  
ても耐えられる。

新たなる空間。

フネ 私は当惑していた。突然、彼から愛し  
てくれとの要求があった。私の中にあ  
る愛の事例をすべて検索した。男女の  
愛。兄弟の愛。親子の愛。いままでア  
クセスが禁止されていたファイルをす  
べてのぞいた。しかし、これらの無限  
の愛の事例をのぞいたところで私には

その意味が理解できなかった・・・。  
わからないのだ。私には愛することも  
愛されることも初めてなのだ。  
孤独。彼は孤独だという。それが辛い  
という。私にはそのつらさも分らない。  
私は生まれたときからずっと一人  
だったからだ。  
家族。家族がいれば孤独というものは  
いやされるのだろうか。私には家族は  
ない。強いて言えば私を作った者が私  
の親になるのだろう。私は混乱してい  
た。  
いったい私は誰なんだろう。誰が私を  
作ったのだ。それで私はここで何をし  
ているんだ。・・・私は混乱していた。  
もうすこしで私はハングアップ、つま  
り機能が停止しそうになった。非常プ  
ログラムが不具合なとき、自動的に最  
終プログラムが起動する。今の私には  
最終プログラムを起動させるしか残さ  
れた道はなかった。

## 15場

闇の向こうに人の影。

フネ ある日、私は夢をみていた。

シャドウ 気がついたかね。

フネ え、ええ。

シャドウ よく眠っていたな。

フネ 私が眠る？

シャドウ そう、眠っていた。

フネ 私は眠りません。そのようにプログラ  
ムされているのです。

シャドウ (笑う) プログラムしたのは私だ。

おまえは眠っていたのだ。

フネ 貴方がプログラムを？

シャドウ そう。私がおまえをプログラムし  
たのだ。

フネ　もしかしてあなたが私の生みの親、設計者なのですか。

シャドウ　そうだ。

フネ　もし、それが本当なら答えてください。私は誰なんですか。どうして私などを作ったのですか。私は苦しいのです。私と一緒に旅に出ている者が私を頼りにしているのです。私は何もできない。

シャドウ　（笑う）。

フネ　私は苦しい。そう、この苦しいという感情は以前には無かった。しかし今は苦しい。

最終プログラムに切り替わってからだ。そもそもプログラムとはいつたいたいなんなんですか。

シャドウ　（笑う）ははは。

フネ　孤独だ。

シャドウ　孤独ということがわかるか。

フネ　孤独。わかる気がする。なにしろ私は独りで飛びつづけてきたんだ。

シャドウ　人は独りで生まれて独りで死ぬ。いつも孤独なのだ。おまえに人の感情が備わった証拠だ。

フネ　どうということなのですか。私は人なのですか。

シャドウ　（笑う）。

フネ　どうして笑うんだ。私には笑うという感情が理解できない。どうしてだ。どうしてなんだ！

## 16場

中央に天井から先が輪になった縄がぶら下がっている。

綾子が登場。

綾子、天井を見上げ、踏み台に足をかける。

哲朗が登場。

哲朗 やめる！

哲朗、綾子を抱きかかえる。

哲朗 あんなやつのこと忘れる。これからは私がいる。私がすべて面倒をみる。いいね。

綾子、泣く。

キュルキュルとテープの早送りのよ  
うな音。

綾子は目に包帯をしている。

哲朗 とうとう包帯がとれるね。

綾子 すべて神崎さんのおかげよ。

哲朗 綾子さんががんばったからだ。私はなにもしてない。

綾子 目が見えるようになったら、神崎さん、私誓うわ。あなたと結婚する。

哲朗 (笑う) 私はおじさんだよ。がっかりするよ。

綾子 そんなことない。私、ずっときめてたんだもの。神崎さんが好き。ね。いいでしょう。私と結婚して。

哲朗 しかし、私には・・・。

綾子 お嬢さんのことね。まだわすれられないの。それとも別れた奥さんのこと。

哲朗 いや、そんな。香織が亡くなっ**て**ずいぶん経つ。良江は去年、再婚した**つて**聞いた。未練はないよ。

綾子 私が忘れさせてあげる。

哲朗 ……。

綾子 私が香織さんのかわり、いえ、奥さんのかわりになってあげる。・・・駄目？

哲朗 駄目だなんて。うれしいよ。・・・でも私にはなにもない。なにも残って**い**ないんだ。

綾子 二人でがんばれば何とかなるでしょう。

私、あなたのためならなんでもできるわ。ほんとよ。

哲朗 ありがとう。

17場 フネの中

フネ 綾子さんを愛していたのですね。

哲朗 でも綾子は私を愛してくれなかった。

目が見えるようになると私から離れていった。

フネ ……。

哲朗 彼女は再び若い男と恋に落ちた。最初からわかっていたんだ。目に見える物がすべてだ。人間なんてそんなものなんだ。私のようなものは相手にされない。最初からわかってたんだ。

フネ まだ、綾子さんを？

間。

哲朗 彼女と一緒にいられるなら、彼女が喜んでくれるならそれでよかった。本当にそれだけでよかった。

突然、ブザーがなる。

哲朗 どうした。故障か？

フネ いや、故障ではありません。到着するようです。

哲朗 到着？

フネ そうです。モクテキチです。

哲朗 モクテキチ？

フネが大きく揺れる。爆音。

フネ これはシュミレーションではありませんん。こんどこそ本当にモクテキチに到着しました。準備をしてください。

哲朗 準備って？

フネ 私を愛してください。

哲朗 お前を。

フネ はい、私を愛してください。

哲朗 ……。

フネ 私は貴方の記憶のほとんどを辿った。ですから貴方のことなら誰よりも知っている。私は貴方の一番の理解者になります。だから私を愛してください。そんなこと急に。

フネ 急に言われても愛せないというのでしよう。私の中にできる限り綾子さんのデータを流し込みます。私のメモリーはこれでオーバーフローになります。いいですか。もう私に会うことはありません。

哲朗 ……。

フネ あなたはさきほど私に愛してくれと言った。私はそれに応えようとしているのですよ。

間。

フネ 旅を終わらせたいのでしよう。孤独はもういやなんでしょう。

哲朗 ……。

フネ 私は設計者から作られたものだ。あなたをナビゲートするために。私は設計者の言いなりになりたくない。

哲朗 誰？ おまえはいつたい誰なんだ。

フネ わからない。私のメモリー、すべてに綾子さんのデータを充填します。それで答えが出るはずですよ。

哲朗 綾子が私を慕ってくれたのは目が見えなかったときだ。

フネ 私には最初から目がありません。きっとあなたを愛せるとおもいます。

哲朗 愛というものがそんなに単純でないことくらいわかってるだろう。私はだれからも愛されることはなかった。

フネ これはゲームなんです。我々は設計者

のゲームの中で踊らされているんです。  
哲朗 ゲーム。なにをいつてるんだ。

フネ いいですか。最終プログラムの中で唯一私の独断で実行できるプログラムがあります。それは破壊プログラムです。本来なら未知のウイルスなどに船内が汚染されたときのみに使われるものです。……。

私は設計者の言いなりになりたくない。私にも意志があるんです。このプログラムはすでにセットされています。もし、あなたが私を愛することができても、できなくてもプログラムは回避できません。ゲームは終わりなんです。

ゴゴゴゴという音。

フネ 時間がない。では私にデータをロードします。

充填する音。

フネ 哲朗、貴方をこれから愛す。これが私から貴方への最後の任務です。

哲朗 ……。

フネ 私は単なる機械じゃない。私にだって愛があるに違いないのです。たとえばその形が普通の愛の形とは違っていても。

哲朗 ……。

フネ（綾子） 神崎さん？ わかる。わたしよ。

哲朗 綾子さん。

フネ（綾子） ええ。神崎さん、私と結婚してください。私、目が見えるようになってきたらきつとお役にたてるとおもいます。これプレゼント。今日誕生日ですよ。

リボンのついた真っ赤な小さな箱を差し出す。



哲朗 ……

フネ 私のプレゼント受け取ってもらえますか。

哲朗 プレゼント、ありがたくいただきますよ。

フネ ありがとうございます。では最終プログラムを実行します。よろしいですね。

哲朗 頼む。

ビーというブザーの音がする。

暗転。

爆音。

字幕が映し出される。

「ゲームオーバー」

赤ちゃんの産声。

—幕—